



令和6年度

地域経済政策推進事業費補助金

(被災12市町村における地域のつながり支援事業)

取組事例集

はじめに

本事業は、福島相双復興推進機構（福島相双復興官民合同チーム）の個別訪問活動を経て集められた被災地域の声や要望を基に、経済産業省で平成28年度に設けられた事業です。

東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴い避難指示等の対象となった福島県田村市、南相馬市、川俣町、広野町、楡葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村及び飯舘村における被災者の人々とのつながり創出を通じ、地域の活性化、さらには産業復興や、まちづくりにも資するような取組を支援することを目的とし、令和6年度「地域経済政策推進事業費補助金（被災12市町村における地域のつながり支援事業）」を実施しています。

震災から14年目を迎えた被災地域で帰還された皆様が、復興やまちづくりに熱い想いを持って取り組んでおり、着実に地域コミュニティの再生に向けて歩みを進めておられます。そして、避難先においても被災者の皆様は人と人との新しい交流やふれあいを通じて、生きがいややりがいの創出につながる取組を続けておられます。

令和6年度において、地域の自治体や関係団体の皆様の協力のもとに取組を行った皆様の一例をこの事例集にまとめさせていただきました。福島県や被災地域のみならず、全国の皆様方にこれらの取組による復興への歩みにご理解を深めていただくとともに、被災された皆様が今後これらの取組を参考に、新たな人々のつながり創出や、さらなるコミュニティ再生へ向けて活動していくための一助となれば幸いです。

最後に、この事例集の作成にあたり、取材や資料のご提供などにご協力いただきました各取組団体の皆様をはじめ多くの関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

令和7年3月

株式会社ジェイアール東日本企画

令和6年度 地域経済政策推進事業費補助金
（被災12市町村における地域のつながり支援事業）事務局

目 次

被災12市町村における地域のつながり支援事業 事例紹介

01. みやこじ商工祭2024 3
(対象者:田村市 / 実施地:田村市)
02. あー夢工房ソーイングで交流・製作体験 4
(対象者:南相馬市 / 実施地:南相馬市)
03. みんな集まれ!魚つかみ取り体験@川俣 5
(対象者:川俣町 / 実施地:川俣町)
04. ～檜葉町～「町外から」の新規創業者達と都市部大学生による、..... 6
町民との賑わい創出交流イベント(ばーぷる)
(対象者:檜葉町 / 実施地:檜葉町)
05. カラオケ教室等を切り口とした川内村民の生きがいつくり、..... 7
近隣町村との交流への取組
(対象者:川内村 / 実施地:川内村)
06. 「かごうま」再現と花嫁行列 8
(対象者:浪江町 / 実施地:浪江町)
07. 葛尾村での結文化体験を通じたコミュニティ再生事業 9
(対象者:葛尾村、田村市、郡山市、三春町 / 実施地:葛尾村)
08. 演劇と合唱を楽しむ会 10
(対象者:南相馬市、双葉町、浪江町 / 実施地:福島市)
09. 「ごきげんさん対談コンサート&ごきげんマルシェ」 11
(対象者:南相馬市、川俣町、飯館村 / 実施地:飯館村)
10. 夜の森パークシネマ 12
(対象者:富岡町、双葉町、浪江町 / 実施地:富岡町)
11. 「越谷市での農園活動を通じた地元との交流」 13
(対象者:南相馬市、檜葉町、大熊町、浪江町 / 実施地:埼玉県)
12. 物づくり、食育を通して、避難者・帰還者の孤立化防止と生きがいつくり、... 14
避難先地域住民との交流・コミュニティ形成
(対象者:南相馬市、広野町、檜葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町 / 実施地:いわき市)
13. 「そば打ち体験・三日とろろ」郷土料理教室 15
(対象者:浪江町、飯館村、福島市 / 実施地:二本松市)
14. 地域の魅力発信事業(第12回「野馬追の里南相馬 16
～子どもたちが描くふるさと絵画展～」及び相馬野馬追市外展示事業)
(対象者:南相馬市、東京都 / 実施地:相馬市、南相馬市、東京都)

※掲載している取組については、費用の一部を自己負担している場合があります。

取組の概要

都路町では少子高齢化と町外への若者の流出により、地域コミュニティが希薄化していました。そこで、本取組では都路町商工業者が一丸となって「みやこじ商工祭 2024」を開催しました。震災以降、ともに歩み続けてきた地域住民同士が日頃の感謝を伝え合い、協力し合うことで、「楽しさ」「賑わい」「つながりの輪」を広げることを目的としました。多世代間や異業種間の交流による、活気ある街づくりを実現しています。



取組の様子

10月19日に「みやこじ商工祭2024」を、都路町の古道体育館と古道体育館前広場で開催しました。都路小学校全児童30名による「和太鼓演奏」を皮切りに、地元交流サロンのメンバーによる「田村市民の歌」を披露しました。また、建築業者の協力により、地元産木材を活用した「木工教室」でのイス作り体験や都路の豊かな自然の中での「ツリークライミング体験」も実施しました。他にも、郷土の歴史に触れる「田村方言ジャンボかるた大会」、都路中学校全生徒による合唱披露などが行われ、大人から子どもまで多数の方が参加しました。

また、同じ被災地区として国道399号線（通称「あぶくまロマンチック街道」）で結ばれた、浪江町・飯舘村・葛尾村・都路町・川内村の特産品の販売も行いました。商工会青年部と都路小学校児童のコラボによる「都路KIZUNAドッグ」の披露や秋の味覚「焼きサンマの振舞い」などが実施され、商工業者と地域住民のつながりの輪を広げることができました。

実施者の声

当日は地区内外から多くの方が参加し、とても賑やかに祭りを開催することができました。都路の宝でもある子ども達をはじめ、住民の笑い声にあふれた一日となりました。各団体の協力のもと、世代を超えた活動を実施したことで、地域の活性化やにぎわいの創出を生み出すことができました。今後も地域内外で連携を図り、都路の更なる発展に貢献していきます。

参加者の声

「秋の美味しい物がたくさんあり、満喫できました」「ステージの内容がとてもよかったです」「子どもたちの演奏やステージショーなど企画満載でよかったです」「毎年楽しみにしています」「カルタ大会やツリークライミングなど参加できるイベントが多く、来年も参加したいです」

取組の概要

震災後に原町区に避難をし、生きがいや復興に寄与するため、ソーイング教室を開設してきました。いずれの場でも、地域の方に大変お世話になってきました。本取組では、少しでも地域の役に立ちたいという想いから、ソーイング製作体験会を開催。住民同士が語り合えるコミュニティの場を設けることで、交流やつながりが深まることと、地域の賑わいの回復、地域産業の復興を目的としました。



取組の様子

12月8日に南相馬市原町区のひばり生涯学習センターで、「ソーイングで交流・製作体験」を開催しました。当日は定員40名の体験会を2回開催し、計80名の住民の方が参加しました。洋裁が初めての方も多く、作業開始前は不安を口にされていましたが、裁断済みのニット生地をロックミシンで縫い、1時間ほどでチュニックができあがると、多くの参加者から喜びの声が上がりました。会の間は7名のスタッフがテーブルを回り、生地の縫い方やミシンの使い方を丁寧に指導しました。

この取組を通じて、震災以降、希薄になっていた住民同士のつながりを、ともに作業することで結び直し、地域のコミュニケーションの再興を図ることができたと思います。何より、自分で作った服を着る喜びを感じてもらうことは、生活の質や豊かさの向上につながります。製作体験を通じて生きがいや心のゆとりが生まれることが地域に活気を生み、復興につながるものと考えています。

実施者の声

取組を開催することで、震災を経て、避難を機に居住している南相馬の地に、少し恩返しができたと考えています。今回一番の成果は、参加した方に、自分で服を作れるということを楽しみ、喜んで頂いたことです。この喜びが参加者のコミュニケーションの元になっていました。とてもスムーズに会を開くことができたので、今後も開催を続けていきたいです。

参加者の声

「洋裁の経験がなかったので、最初は自分のできるのか心配でしたが、丁寧に指導していただけたので簡単に作ることができ、嬉しかったです」「とても楽しく作業ができました」「完成に達成感があります」「次回が開催が楽しみです。また必ず参加したいです」

取組の概要

震災後に川俣町の一部が計画的避難区域に指定され、自主避難する住民が増加したことで、地域のコミュニティが崩れていきました。計画的避難区域が解除されてからも、町民の帰還率は低い状況です。そこで、震災前のような住民同士の触れ合いや地域コミュニティを再生すべく、「魚つかみ」のイベントを復活させました。復興に向けた情報発信と地域の賑わいの回復、世代間交流を目的に開催しました。



取組の様子

従来は川で行われていたイベントを、中心商店街の駐車場を借りて実施しました。この商店街は震災前の「魚つかみ」を運営しており、知見のある方々に協力を仰ぐことができました。

猛暑続きでしたが、当日の朝に生簀に水を張り、開始直前に運搬車から魚を放流するなどの工夫を行い、参加された方には生きのいい魚の掴み取りを体験してもらうことができました。

当日は地域住民191名に加え、お盆で帰省客も多かったことから、県外からも42名が参加しました。震災前に同イベントを経験していた住民が、今は親になり、我が子と一緒に参加して魚つかみを楽しんでいる光景や、祖父母と孫たちが一緒に来場する姿などを見ることができました。家族の声援を受けて魚を追う様子はとても微笑ましく、温かいものを感じました。取組を実施したことで、普段は静かな商店街の一角にたくさんの歓声が響き渡り、町に賑わいを取り戻すことができました。

実施者の声

震災以降、中断していたイベントでしたが、今回の開催では、震災前に実施していた方々にご協力いただくことができました。イベントに参加した多くの住民から「楽しかった」「子供がとても喜んでいて」「またやってほしい」などの声を聞くこともでき、今後の開催に向けたモチベーションにつながっています。資源や協力者の確保を工夫し、地域の交流やつながりを創出する夏の風物詩として継続していきます。

参加者の声

「子どもと参加できてよかったです」「また来年も開催してほしいです」「このイベントの復活が親子の間で話題になり、家庭内の会話の機会につながりました」「大人も子どもも楽しめました。来年もまたぜひ参加したいです」

取組の概要

本取組では檜葉町で、住民同士のつながりや町の賑わい不足を解消することを目的に実施しました。町には、子どもたちが楽しめる場所が少ないという課題がありました。そこで、「被災地」のイメージを払拭して、「面白いことがある町」として認知を広げることを目的としました。具体的には、ウォータースライダーや移動式プールを設置し、子どもたちや家族が楽しめるイベントを開催し、賑わいを創出しました。



取組の様子

今年で2年目となるイベントを、8月24日・25日の二日間、檜葉町の「天神岬スポーツ公園」で開催しました。全長7mのウォータースライダーや10m×10mの水深60cmプール2基を設置し、子どもたちが楽しめる遊び場を提供しました。運営はライフセーバーの資格を持つ大学生を主軸に、地域おこし協力隊や首都圏の大学生が行いました。

当日は、檜葉町の住民や里帰りをしてきた町外の家族を中心に、150名の参加者が集まり、賑やかで楽しい雰囲気となりました。昨年からのリピーターも訪れ、住民と学生が親睦を深める場面を見ることができました。また、住民から「飲食店を出店したい」という要望も出るなど、地域に根付いたイベントとして成長を感じることができました。

子どもたちや家族が楽しめる場を提供することで、町への愛着を育むこともできました。今後も、住民の交流促進、町外からの集客による経済効果、地域イメージの向上を目指して、持続可能な地域活性化モデルを構築していきます。

実施者の声

今年は150名もの家族連れに参加していただき、町内だけでなく、里帰りした方なども集客もすることができました。昨年からのリピート参加者も多く、継続的なイベントとして、定着が期待できます。また、首都圏の学生と地域住民の交流が深まり、イベント後に新たな交流も生まれていました。今後も、広報の充実や地元企業や飲食店との連携を深め、地域活性化のモデルケースになるよう取組を続けていきます。

参加者の声

「プールやウォータースライダーが楽しかったです」「安心して子どもを遊ばせられる環境でした」「檜葉町の新しい魅力を知ることができました」「帰省時に家族で楽しめるのが嬉しいです」「地域住民と学生が協力しているところが良かったです」「来年はお店を出店したいです」

取組の概要

震災後、避難生活から川内村に戻ってきた住民もいますが、友人・知人や近隣住民が戻って来ていない場所もあり、震災前の地域コミュニティはなくなっています。そこで、人との交流とつながりを創出すべく、カラオケを通じた生きがいづくりを行い、教室を開催しました。

また、教室を通じて村内だけでなく、いわき市や田村郡小野町の住民との交流も生まれるようになっていきます。



取組の様子

川内村にあるカラオケ機器を保有する施設がほとんどなく、村内にある飲食店を利用して、6月から翌年1月まで、毎月3回のカラオケ教室を開催しました。1回の開催時間は3時間程度で講師には、カラオケ教室での指導実績がある方を招聘しました。

教室では、参加した方全員で歌う課題曲の練習をはじめに行い、その後で各自が選んだ、個人曲の練習を行いました。講師は一对一で息の使い方、音程などの歌唱指導を行います。また、教室で学んだ曲を披露するための成果発表会を1回開催し、練習した曲を1人2曲披露しました。カラオケが上手になりたいという想いの強い方が多く、教室でも成果発表会でも曲に真剣に向き合っていました。そのため、練習を重ねるたびに、歌唱が上達していることを実感することができていました。成果発表会では、歌を披露した後の達成感でいっぱいの表情を見せていた方が多く、住民の新たな生きがいづくりを行うことができました。

実施者の声

平成30年度から当事業を実施しています。当初は、家族以外で集まる機会が少なく、楽しみや生きがいもなく、どこか暗い雰囲気醸し出している住民が多くいました。しかし、この取組を始めてから、一緒に参加する人たちとの交流が生まれました。仲間と共に一つのことに取り組むことで、自然と笑顔が増えるようになっていきます。今後も地域住民の方々との生きがいとなるカラオケ教室を続けていきます。

参加者の声

「毎回、カラオケ教室が開かれるのを楽しみに待っています」「仲間と交流できることが嬉しいです」「最初は下手で、人前で歌うのが嫌でした。でも、カラオケ教室に通うことで自信を持って人前で歌うことができるようになりました」

取組の概要

震災によって途切れかけた町の伝統や風習を伝え、解体が進む中、やむを得ず廃棄されようとしている、民具・衣装などを再活用する取組を行いました。元々の浪江町の住民と新たな住民や、高齢者と若者など、普段接する機会の少ない人が協働し、知り合う機会を創出しました。具体的には、かご馬作成のワークショップと、リサイクル品の花嫁衣裳や古民具などを展示し、それらを使った花嫁行列を行いました。



取組の様子

本取組は、浪江町の住民（帰還者、未帰還者）と近隣市町村住民の協力のもと、浪江町地域スポーツセンターで開催された「十日市祭り」の一環として実施しました。

町内で収穫された稲わらと、伐採した竹を使用したかご馬作成のワークショップを開催しました。稲わらは経験者の指導を受けながら、自分たちで槌打ちや縄もじりも行い、この縄で、かご馬を作成しました。また、十日市当日は、リサイクル品の花嫁衣裳や古民具などを展示し、それらを使って花嫁行列を実施しました。花嫁行列に伴い、住民の和装の結婚式の写真や実際のかご馬の写真も展示することができました。

参加者同士が積極的に関わり合い、予想以上の大きな取組を行うことができました。取組を通じて、住民同士が出会う機会を多く提供することができました。また、古くからの町の暮らしや風習を新たな住民に知ってもらうことや、不用品を再活用することの楽しさも伝えることができました。

実施者の声

十日市祭りを大いに盛り上げることができました。特に、縄もじり体験が好評で身近な自然を活用し、物を作る楽しみを伝えることができました。また、着物に興味を持つ若者を増やすこともできました。次回の十日市でも実施予定です。これまでは壮年以降の旧浪江町の住民が主体となってワークショップと花嫁行列を実施してきました。今後は取組を引き継いでくれる若手の育成も検討し、継続していきます。

参加者の声

「かご馬の風習を初めて知りました」「よくぞ衣装や道具を取っておいてくれました。捨てずにいてくださった方ありがとうございます」「古い結婚写真の中に知人を見つけ、会場で数十年ぶりの再会することができました」「久しぶりに着物に袖を通しました。こんな機会でもないと着物を着ることがないので、うれしかったです」

取組の概要

震災による長期避難の影響で、村内のコミュニティが失われています。しかし、近隣の田村市、三春町、郡山市などに避難した住民が、定期的に村を訪れ、庭の整備などを行っています。その姿に、住まいは異なっても住民の心理的なつながりは途絶えていないと考えました。そこで、元々の葛尾村の住民を対象に、つながりの再生を目指すべく、炭窯づくりやしめ縄づくり、味噌づくりの体験を行いました。



取組の様子

本取組では、村内外に暮らす葛尾村住民を対象に3つの体験会を開催しました。8月にはお祭り用、12月には年越し用のしめ縄作りを実施しました。しめ縄作りは、神事用と生活用で異なることなど、地域の文化を話題にしながら、参加者が楽しく制作を行いました。9月には、古くから村内で行われてきた炭焼き窯を模し、2メートル程の小さな窯を古民家の敷地に作りました。作業を通じて、村に伝わる伝統を学ぶ機会を持つことができました。12月の味噌作りでは、村で収穫された大豆を一日目に羽釜で煮て、二日目につぶし、麴や塩などの材料と混ぜる作業を行いました。和気あいあいと作業を行い、味噌が食べられるようになる半年後に思いを馳せる、楽しい時間を持つことができました。いずれの体験会にも地元住民に加え、近隣からの参加者が多くあり、延べ60名が参加しました。村の歴史や文化を学ぶとともに、村内外の住民がつながり直す機会を創出することができました。

実施者の声

取組を通じて、震災以降途切れていた地域コミュニティの再生を行うことができました。体験会を行うことで、村に伝わる暮らしの知恵を学ぶとともに、その知識の伝承が途切れ消えかけていることにも気がつきました。今後は村の暮らしの中で培われた叡智を、次世代につなぐ取組も積極的に行っていきます。

参加者の声

「初めての体験でしたが、丁寧な指導のもと楽しく参加することができました」「味噌づくりをしながら、参加者のみなさんと楽しくおしゃべりすることができました。作った味噌は、夏頃から食べられるようなので、今から楽しみです」

取組の概要

震災から14年近くが経過したことで、避難者同士のつながりが薄れてきています。被災後の鬱積した悲しい感情を解き放ち、避難者のつながりを再構築するために、取組を実施しました。対象は、相双地区から避難して福島市内の復興公営住宅である笹谷団地に住んでいる方を中心とした、周辺住民です。中には外出をあまりしない方もいることから、積極的に外に出て、交流を深めるきっかけになることを取組の目的としました。



取組の様子

取組には、演劇役者6名と合唱者14名が参加しました。練習は代表宅で週1回、県営北沢又団地集会所で3回行い、リハーサルと本番公演は県営北沢又団地集会所で行いました。本番公演には74名が訪れました。

参加者の皆さんにとっては、どれも初めての経験で、当初は演劇出演希望者がなく大変でした。また、70代以上の参加者が多く、セリフを覚えることに苦労していましたが、練習を重ね、アドリブも入れるなどの工夫をして、無事本番を迎えることができました。合唱では添乗員に扮した指揮者のもと、世界各国を歌で巡る演出を行いました。また、ステージの中間にピアニストによる演奏も行いました。

本番までには大変なこともありましたが、コミュニケーションを重ね、支え合うことで乗り切ることができました。演劇も合唱も最後は丸くなって練習を重ね、楽しく充実した公演を行うことができました。

実施者の声

どれくらいの人が公演に来てくれるのか、当日まで本当に不安でしたが、会場一杯の観客がいて、本当に嬉しかったです。素人による短期間の練習でしたが、劇で伝えたいことを分かってもらえました。合唱では、声と体でとても楽しいことができるということを、伝えられました。演劇では、セリフの暗記が大変でしたが、達成感を得ることができました。また機会があれば、再演を行いたいです。

参加者の声

「演劇を見て、抑え込んでいた心の叫びが共鳴し涙が止まりません。心が軽くなりました」「初めて合唱を見ました。住まいの隣人が楽しく歌って踊っていてビックリしました」「孫も楽しみ、大はしゃぎしていました。次回はぜひ初めから参加したいです」

取組の概要

飯館村の住民は県内外の各地に避難し、慣れない土地での暮らしを余儀なくされ、心身ともに大きな負担を抱えた人が多くいます。現在も帰還する人は少なく、避難先で新しい生活を送る人もいます。みなさんはさまざまな理由や想いで、暮らしを送っています。

本取組では、村民はもちろん、地域を問わず震災によって心身に負担を抱えた人、現代のストレス社会で悩む人が、少しでも豊かな心で「ごきげん」な暮らしを送れることを目指して実施しました。



取組の様子

飯館村にある公共施設「交流センターふれ愛館」全館を利用して行いました。まず、声楽と発達心理学の専門家による「ごきげん対談コンサート」を二部構成で実施しました。発達心理学の専門家が、幼少期から高齢期までの各発達段階（年代）の特徴に関する解説し、声楽家が各発達段階（年代）にあった曲を披露しました。全員が参加して歌唱するなどもし、充実度の高い有意義な時間となりました。

一部と二部の終了後に「ごきげんマルシェ」を開催しました。福島県内から10店舗以上のお店が集結し、色とりどりの商品が並びました。さまざまな世代の人がコミュニケーションをとり、楽しく賑やかなひと時でした。また、「ごきげんマルシェ」では、相談コーナーも設けて、参加者が発達などに関して気軽に相談できるようにしました。本取組では、対談コンサートとマルシェの開催時間や配置を分け、双方が参加できるように工夫し、関わるすべての方と「ごきげん」な時間を共有することを心がけました。

実施者の声

本来であれば、「発達心理学」「声楽」「マルシェ」はひとつひとつが目的を持って、講演（公演）・実施されることが多いものです。本取組では、さまざま方の協力を得て、この3つの要素をつなぎ合わせて、「ごきげん」への近道を提供するという、画期的な試みを実施することができました。今後もこの取組を開催していきます。

参加者の声

「発達心理学という言葉を知りました。こんなにも、自分たちに馴染みがある内容だとは思いませんでした。もっと早くに知りたかったです」「はじめて声楽科の歌声を生で聞いて、鳥肌が立ち感動しました」「珍しい商品を販売するお店などもあり、見るだけでも楽しかったです」

取組の概要

富岡町では特定復興再生拠点の避難指示が令和5年に解除され、桜並木のある夜の森地区での居住が可能となりました。しかし、いまだ居住者は少なく、地域に根付いていたコミュニティは失われたままです。桜まつりのイベントが復活し賑わいを取り戻しつつありますが、シーズンを過ぎると、地域に活気がなくなります。そこで、賑わい再生や地域の活性化、交流人口の拡大を目的に、夜の森公園で野外上映会を開催しました。



取組の様子

町内の夜の森公園内に大型スクリーンを設置し、映画を上映しました。SNSや地元の新聞などで周知を図り、当日は20代から60代までの約50名が参加しました。参加者のほとんどは、双葉郡在住・在勤の方でした。「夜の森パークシネマ」では、ピクニック気分で映画を鑑賞してもらえるよう、芝生が広がるエリアに観客席を用意しました。思い思いに映画を楽しむ参加者の姿が見られました。会場には、飲食や物販ブース、ワークショップブースを設け、参加者同士の交流の機会につなげました。上映作品は、住民の方が町や人に想いを馳せ、共感していただけそうなものを選びました。

上映会場の設営・撤去に加え、当日の受付や進行、誘導などの運営業務は、双葉郡在住・在勤の方に広くボランティア参加を呼びかけました。主体的にイベントに携わってもらうことができ、協力して取り組むことができました。上映会の翌朝には、上映会場周辺のごみ拾いを参加者で実施し、映画の感想を共有し合いながら交流を図りました。

実施者の声

富岡町での開催は初めてでしたが、町内外から約50名の方に参加してもらうことができました。参加された方からは温かいコメントや感想を多くいただき、今回の取組の意義や伝えたいメッセージは参加者の方に伝わったと考えています。今後も、富岡町や双葉郡でこうした取組を継続して行い、新たなイベントとして定着させるとともに、さまざまな世代がつながる機会を増やし、地域の活性化に貢献していきます。

参加者の声

「なかなか観ないジャンルの映画だったが、富岡町と重なる部分もあり、とても面白かったです」「大画面で見る価値のある素敵な映画でした」「地域の方々と交流する機会にもなり、とても満足です」「ぜひ次回も参加したいです。楽しみにしています」

取組の概要

平成28年に越谷市近隣に避難している人が孤立しないよう、交流の場として「あゆみの会」を設立しました。会では、情報の共有や地域住民との交流を深め、生き生きとした生活ができるよう活動をし、地域の自治会とも交流を図っています。本取組では、農園を拠点にした野菜づくりやレクリエーション、8月の自治会夏祭りに合わせたなみえ焼きそば料理教室と、生け花教室を開催しました。



取組の様子

活動の拠点となる農園は、地域の支援者から約200坪を無償で借り受け、年間を通して季節の野菜の植付け、収穫を行っています。ジャガイモ・サツマイモの収穫時に、会員に案内を行い収穫祭で交流を図っています。また、9月のサツマイモ収穫・サンマ祭りでは、畑に会場を設営して福島県いわき市からサンマ100匹を仕入れて、畑でサンマ祭りを行っています。避難者と支援者、埼玉の大学生が参加し、交流を図っています。この農園活動には、延べ170名が参加しました。

なみえ焼きそば料理教室は、避難元の浪江町出身の方が先生となり、自治会館で開催しました。避難者24名と地域の支援者が多数参加し、なみえ焼きそばで地域交流を行いました。生け花教室は、東日本大震災、能登半島地震などの被災地支援を生け花教室で支援している講師の先生の協力を得て開催しました。被災者15名支援者5名の合計20名が参加しました。

実施者の声

取組は、地域の方にさまざまな形で支援していただくことができました。特に畑の活動は、避難者と住民の関係づくりにつなげることができました。震災から14年が経ち、避難者が自立した生活を送れるようになったことや、高齢化に伴う外出意欲の低下で、会への参加者が少なくなっているのも事実です。今後は、参加したいと思える事業の開催や方法を検討し、取組を行っていきます。

参加者の声

「野菜づくりは、誰でも楽しくワイワイおしゃべりしながら参加できます。収穫には達成感もあります」「なかなか食べられないなみえ焼きそばが食べられて、懐かしかったです」「講師の先生が詳しく説明下さったので、生花に挑戦しました。楽しく活けられて素敵な時間を過ごす事ができました」

取組の概要

相双地区から避難していわき市内の復興公営住宅に入居している方と避難先であるいわき市で自宅再建した方を対象に、孤立の予防や希薄化する同郷の人達とのつながりを結び直すことを目的に実施しました。取組を通じて、避難先での生活に潤いや豊かさを創出し、人とのつながりを感じることで生きがいになることを目指しました。具体的には、季節を感じながら植物や土に触れることで、生活にメリハリができる季節の寄せ植え教室と毎年恒例のそば打ち教室を開催しました。



取組の様子

寄せ植えでは土や植物に触れ、季節を感じながら精神的な安定、落ち着きを得ることが出来ます。一緒に花を植えることで参加者同士のコミュニケーションも生まれました。教室は、農業生産所で実施し、教室を終えた後にも、新たな植物の購入や育て方などの指導を受けることができる環境を提供しました。

蕎麦打ち教室は、年末に開催しました。年越しそばとして食べられるように保存方法を教えてもらいました。自分の打ったそばを家族と囲むという新たな趣味や興味が、生きがいとなることを期待しています。教室は公民館を利用し、ほかのサークルや団体の活動情報を見ることもできました。

実施内容は事前にヒアリングを行い、決定したこともあり、昨年からのリピーターを中心に、その知人や友人に参加してもらうことができました。参加者同士が顔なじみであることも多く、終始笑い声の絶えない賑やかな雰囲気の中で教室を実施することができました。

実施者の声

定期的に開催することで、参加者同士のつながりが増え、教室以外での交流が増えています。参加者間での安否確認も行われています。また、仲間に会うために出かける楽しみを創出することもできています。一方で、参加者が高齢となり、教室開催場所までの交通手段の確保が難しいなどの課題も出てきました。次年度も継続して開催し、より多くの人とのつながりが感じられる取組を実施していきます。

参加者の声

「寄せ植え教室の後に、仲間とランチに行くことが何よりの楽しみです」「外出する機会がないので、同郷の人達と気兼ねなく話ができる貴重な時間です」「毎年持ち帰るそばを家族も楽しみにしてくれています」「帰省する息子家族に自分で打ったそばを食べさせることが楽しみです」

取組の概要

震災以降、集会所に於いては団地入居者同士の交流が進み、近隣町会との交流も始まっていますが、参加者は一部の入居者に留まっています。そこで、団地住民、近隣町会、近隣で活動しているグラウンド・ゴルフ会員を対象に取組を行いました。今後の生活を豊かにするために、避難先の二本松市の方と今回の料理教室を通して親睦を深め、近隣に顔見知りを増やし、安心して安全な環境づくりを目指しました。



取組の様子

取組は石倉団地内集会所と安達公民館で開催しました。団地住民、近隣町会のほか、団地自治会主催のグラウンド・ゴルフの交流会で顔見知りとなった近隣グラウンド・ゴルフ協会の会員や料理教室で知り合った近隣町会婦人部や、近隣で活動しているそば打ち愛好会会員にも声をかけました。

具体的には、年末にそば打ち体験を行い、年始には避難元の風習でもある三日とろろとそのほかの郷土料理教室を行いました。避難している団地住民と、避難先の近隣の二本松市民がお互いに懐かしい故郷の風習について語り合いました。避難先・避難元の特産の野菜を使ったメニューを共に調理することで、互いの理解を深めることができました。年末年始の慌ただしい時期ではありましたが、年越しそばや三日とろろという季節の風物詩を楽しみながら、郷土を懐かしむ機会となりました。避難先の二本松市の特産物を使って調理をすることでお互いの風習や行事について会話が弾む楽しい会となりました。

実施者の声

震災以降、体育館や仮設住宅を経て、二本松市の復興団地である石倉団地へ入居して8年以上が経過しました。団地近隣での顔見知りも増えつつありますが、親睦を深める機会がありませんでした。取組を通じて、団地住民と近隣の住民と一緒に調理をしながら会話を楽しむことができ、より理解を深めることができました。交流会をきっかけに顔見知りが増え、今後もグラウンド・ゴルフや料理教室と一緒に活動する機会を増やすことができます。

参加者の声

「近隣に顔見知りができて良かったです」「今後も、定期的にグラウンド・ゴルフや料理教室を共にすることで、避難先である二本松でも安心して暮らすことができそうです」「地域での楽しみが増えました」「浪江町と二本松市それぞれの風土や習慣の違いが聞けて面白かったです」

取組の概要

南相馬市内の小学校4～6年生を対象に、「相馬野馬追(そうまのまおい)」をテーマにした絵画を募集。展示する事業を実施しました。南相馬市には、国の重要無形民俗文化財に指定されている伝統行事「相馬野馬追」があります。しかし、祭事関係以外で地域の子どもたちが関わる機会がありません。そこで、夏休みの選択課題に絵画展への応募を組み込み、地域の子どもたちが伝統文化に触れる機会を創出しました。

本取組は、愛郷心を育てていくことを目的として開催しました。応募作品は審査会にて入賞作品を選定し表彰したほか、市内会場にて応募全作品を展示しました。

また、入賞作品を含めた相馬野馬追に関するパネルなどを展示する事業を、東京競馬場内の「JRA競馬博物館」にて実施しました。競馬人気が高まる中で、引退競走馬の活用先ともなっている「相馬野馬追」と競馬ファンとは親和性が高く、地域の生活に馬が根付いていることをアピールすることで、今後の関係人口の創出につなげていくことも目的にして開催しました。会期中は秋のGIレースが重なっていたことから、多くの競馬ファンが訪れ、PRにつなげることができました。



取組の様子

絵画展には156点の応募がありました。作品は9月14日～29日の間、常磐自動車道・南相馬鹿島SA併設のセデッテかしまで展示。約7万人の来館があり、常磐自動車道を利用する多くの方に相馬野馬追を知っていただくことができました。子どもたちの自由な感性で描かれた相馬野馬追の姿からは、祭事の迫力が感じることができ、「実際に行ってみたい」という声が多くありました。9月28日には南相馬市民文化会館ゆめはっとで表彰式を実施。入賞した児童33名を表彰しました。

また、10月12日～11月24日には、東京都府中市のJRA競馬博物館で「馬と人が生きる町～福島県南相馬市～」と題した展示を実施。作品の展示に加えて、競馬ファンに人気のイラストレーターによる、相馬野馬追の3日間を表現したイラストも展示しました。かつて競馬で活躍していた馬が、南相馬で第二の馬生を歩んでいることなど、新たな「相馬野馬追」と地域の魅力を伝えることができました。

実施者の声

今年度は「セデッテかしま」の協力で、市外・県外に向けても発信する機会ができました。競馬博物館での展示では、新たなイラストレーターを起用するなど工夫をしたことで、これまで以上の集客がありました。

今後の課題には環境変化による応募点数の減少があります。現状を踏まえながら、子どもたちへの相馬野馬追に対する意識付けと、効果的な発信方法について検討をしていきます。

参加者の声

「野馬追という素晴らしい文化を、この機会を通してこれからも大切にしていきたいです」「息子は絵が大好きで、来年は大賞をとると意気込んでいます」「東京へ避難して在住中の福島県民です。野馬追をこういったスタイルで見ることができ、同県民として嬉しいです」